



THE BEST
-出張版不定期村-

サンプル版11.18

Y U @ K

こんにちは、YU@K（ユーケー）です。この度は、本書「THE BEST（サンプル版）」を購入いただき、真にありがとうございます。

この本は、私が運営するブログ「[YU@Kの不定期村](#)」の出張版になります。映画や特撮のレビューを中心に、短時間で読める「読みもの」を20編、収録しております。通勤通学の電車やバスの中、映画館で映画が始まるまでの数分間、営業途中のコンビニの駐車場、つまらない飲み会で休憩したいトイレの個室、暇でしようがない休日の昼下がり。そんなあなたのスキマ時間の「暇つぶし」に活用いただけたら幸いです。

<本書の読み方>

- ・目次ページより、読みたいページに飛んでください。
- ・挿絵の下には、それを描かれた方のアカウント等をリンク込みで記載しております。
- ・文中のリンクをタップすると、ブラウザで関連ページが開きます。
- ・各編最後にあるツイートボタンをタップすると、タイトルとハッシュタグ付きのツイート画面が開きます。ぜひ、ご意見・ご感想をお聞かせください。

※完全版は2015年12月末発売予定（無料）。進捗は[こちら](#)で随時更新中。



ネットや世間が何と言おうと俺はマクドナルドを食べ続けたい

【エッセイ】【加筆修正】

2015年5月18日更新記事。マクドナルド愛好家がひたすらにその愛をぶちまけた記事。非常に独りよがりな内容ではあったが、Twitterを中心に更新から半年経った今でも拡散され続けている。マクドナルド、頑張れ、頑張ってくれ。（所要時間：約8分）

■これはステマでも何でも無い

昨今、日本マクドナルドが苦戦を強いられている。ネットを探せば容易に目に入るほどに、ストライキの影響でポテトが販売休止になったり、異物混入で騒がれ対応がまずかったり、色々な問題が立て続けに起こっている。それに伴い、ネットや世間からのマクドナルドに対する風当たりも一層強くなった。ネットでマクドナルドに関するエントリーを見てみると、「こんなのを喜んで食べてるのは味覚障害」「企業としての信頼は地に落ちた」「高かろう悪かろうで誰が行くのか」など、辛辣なコメントが多数ぶら下がっていることが多い。

嘆かわしいことだ。

俺は単なるマクドナルド愛好家だ。俺の人生はマクドナルドと共にあった。別に仕事はマクドナルドとは全く関係ないし、株主でもない。そう、こうやって醜い前置きでもしないと、今やマクドナルドに対して良いニュアンスの意見は叫び辛くなった。これから書くことは、俗にいうステマとか、社員の工作とか、そんなものではない。まあ、それを疑われたからといって反証する材料が出せる訳でもないが、純粋に、マクドナルドが大好きな「俺の」「一個人の」意見だ。以下、愛を込めて「マック」と表記したい。

■マックが“ごちそう”だったあの日

俺の人生はマックと共にあった。まず、母がマックを好きだった。だから、俺たち兄弟もマックが好きになった。父はあまりファストフードを食べない男だったが、仕事柄出張が多く、父が家を空けた時に、兄弟全員で母が「今日はマックにする？」と言い出すのを待っていた。母の手料理は最高だったが、たまに食べるマックも最高だった。車で20分ほどかけて、よくマックに行った。もう20年ほど前のことだ。今ほど、どこにでもマックがある時代ではなかった。

マックは、俺たち家族にとって間違いなく「ごちそう」だった。決して値段が張る外食でもないし、見た目が豪華な訳でも、お店が綺麗な訳でもない。しかし、間違いなく父を除く家族の「ごちそう」だった。俺も、弟も、マックが好きだった。こんなことを書くと、「マックごときをごちそう扱いだなんて可哀想な子供だ」などと思う人もいるだろう。知らん。俺たちにとっては間違いなく「ごちそう」だったのだ。うだうだ言うな。俺の幼少期はマックと共にあった。

今の若い子は知らないかもしれないが、昔はマックのメニューも包装も違っていた。もちろん、100円マックなんてものはなかった。ナゲットも今の5ピースではなく9ピースなんてものがあつた。ハンバーガーの箱も、今とは随分雰囲気違ったんだ。昔の俺はてりやきマックバーガーが一番好きだった。あれは意外と綺麗に食べるのが難しいんだ。口の周りをソースで汚して、その味が残ったままポテトを食べて、コーラで流し込む。考えただけで涎が出てきた。

■中毒者の出会い

俺が思うに、マックのポテトには何らかの麻薬が仕込んである気がする。あれには異常なまでの中毒性がある。定期的に食べないと体がポテトを欲して止まなくなるのだ。揚げたてのポテトはもちろん旨いが、俺ほどのツウになると冷めたポテトこそが“真価”だ。あのへニョツとしたポテトにかろうじて残る塩味がたまらないのだ。そして、焦げて黒くなった先端部分のカリカリが残っていた時の歓びは、何にも代えがたい。ちなみに、ポテトに入っている麻薬は、コーラと一緒に摂取すると効果が倍増する。

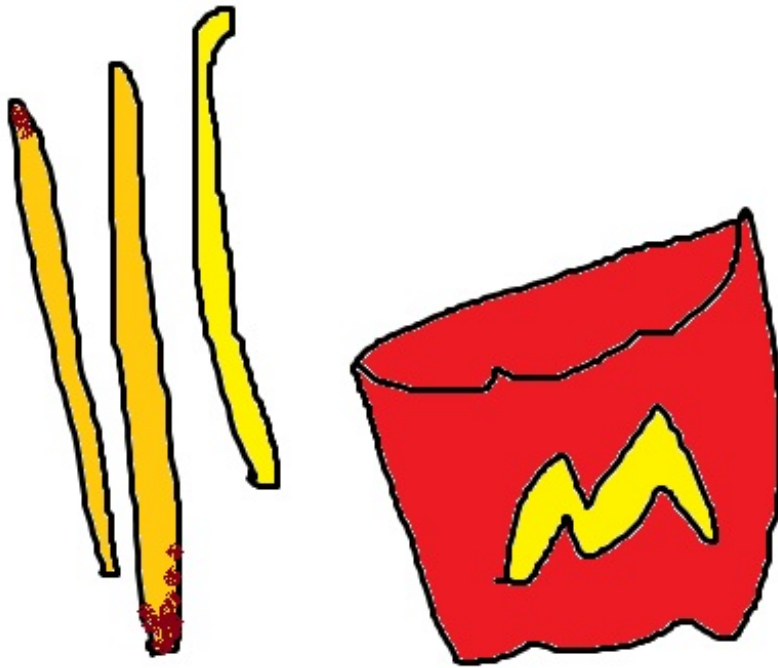
やがて、俺は運命の出会いを果たすことになる。1991年に発売が開始された、そう、月見バーガーである。毎年のように言っているが、俺は月見バーガーを食べるために毎年秋を待っている。この月見バーガーがどれだけ最高なのか、俺の言葉では語り尽くせない。公式サイトで紹介文を掲載するから、それを読んで欲しい。

「月見バーガー」は、1991年の初登場以来、毎年秋の風物詩として親しまれている、人気の季節限定メニューです。満月に見立てたぷるぷるたまご、ジューシーな無添加100%ビーフパティ、スモーキーなベーコンを、月見バーガー専用のトマト風味のクリーミーな特製オーロラソースで味付けし、香ばしいゴマつきバンズでサンドしました

。

・ [日本マクドナルド公式サイト](#)

毎年、秋になるとそわそわしてしまう。月見バーガーが食べられるからだ。こいつとの思い出は無数にある。前の会社に勤めていた時、飲まされた酒に潰れ二日酔いで目を覚ました日も、重い頭を抱えながらマックに行った。月見バーガーを食べながら、昨晚の記憶を辿ったものだ。ネットでは、年々月見バーガーが値上げされていると、鬼の首をとったかのように叫ぶ輩がいる。年に1回なのをいいことにこっそり値上げしているのだ！騙されるな！...という論旨らしい。俺にとってみれば大層くだらない話だ。俺は「月見バーガー」を食べるのだ。「安いハンバーガー」を食べに来ているのではない。



by [YU@K](#)

■ マックと共に歩む人生、その軌跡

そもそも、「マックは高くなった」「ファストフードなのに高くちゃ行く意味が無い」という意見に、俺はいつも疑問符が浮かぶ。俺はいつも「マクドナルド」を食べにマックに行っている。「安いファストフード店」に行っているのではない。「マクドナルド」に足を運んでいるのだ。数百円の値上がりなどさしたる問題ではない。もちろん、安い方が客が多くなるのは分かる。だが、今ここに限っては俺の好みの話をしている。マックはマックだ、値段じゃあない。

話が横道に逸れた。そう、てりやきマックバーガーが長らく俺のベストだったが、月見バーガーがその座を華麗に奪い取ったところまでだった。いつだったか正確には覚えていないが、月見バーガーやグラコロといった期間限定バーガーが一堂に会したキャンペーンもあった（エブリデイスマイルキャンペーン...だったか?）。相当前の話だ。間違いない、まさに「アベンジャーズ」だ。あんなバーガーやこんなバーガーたちがアッセンブルしたあのキャンペーンの強烈さは、今も脳裏に焼き付いている。

高校の時、そのすぐ横にある商業施設のフードコートに、マックが入っていた。部活の帰りに、よくマックで談笑したものだ。ジュースを買って、ポテトを1つだけ買って、それを皆で分け合いながら、中身の無い話をした。これが青春だ。俺の青春はマックと共にあった。

大学の時、マックでバイトしている友人がいた。皆で茶化し半分でお店に行って、お決まりの「スマイルください」をレジに立つ友人にお願いしたこともあった。友人は、レシートの裏面にボールペンでスマイルマークを書いてくれた。座布団1枚案件だった。大学時代といえば、就活も思い出の1つだ。24時間のマックが近所にあったので、よくそこでエントリーシートや履歴書を書いた。コーヒーのみを頼んで居座る大学生はお店には相当迷惑だったかもしれない。許してくれ、客足が少ない夜遅い時間にばかり行っていたから。そこで何十枚もの書類を書いたものだ

。おかげさまで当時は内定をいくつかいただけた。マックのおかげだ。俺の就活はマックと共にあった。

就職した先で、営業マンをやっていた。外回りが多かったので、よくマックを食べた。よっぽど田舎まで行かない限り、マックが見つからないことは無い。お客さんに謝らなければいけない場面も多々あった。そんな陰鬱な営業の帰り道で、マックに寄ってささやかな打ち上げをしたものだ。ポテトの塩味が、俺に元気をくれた。俺の営業はマックと共にあった。

■お前と俺と、春夏秋冬

今でも新作バーガーが出るとほぼ必ず食べることにしている。近年だと、2012年のグランドキャニオンバーガーが美味しかった。あれはレギュラーに加えてもいいけると思う。俺が保証する。というか、定期的に売ってくれ。頼む。ああ、メガマックも良かった。

程なくしてこの頃、店頭からメニューの一覧表が消えたことが話題になった。ネットでは散々叩かれていたのを覚えている。確かに、その気持ちは分かる。が、俺にとっては何の問題も無かった。メニューなんてほとんど覚えている。それに、あらかじめ入店前にクーポンをチェックして今日食べるメニューのあたりをつけている。店に入ってから悩むことは、まず無い。

マックの店内の雰囲気が好きだ。あの油の匂いと、独特な空気。「ああ、俺は今から体に悪い物を食べるんだな...」という感動が、俺を襲う。往々にして、旨い食べ物は体に悪い。だから何だと言うのだ。俺は修行僧じゃないんだ。身体に悪い物を食べられる幸せを、噛みしめていたい。レジの奥の雰囲気も、好きだ。もちろん、あそこに立ち入ったことは無い。しかし、システム化されたルールの中で効率よく生産されていく宝石たちを眺めるのは、目の保養になる。楽しい。テレレ！テレレ！という、ポテトが揚がったのか何かよく分からない時に鳴る機械音も、風物詩だ。あの空間にずっと居たくなる。でも、お店が混雑している時は、パッと食べてすぐに立ち去るのが愛好家としてのマナーだ。

俺の人生はマックと共にあった。好きなものは好きと言える気持ち、抱きしめてたい。

確かに、ここ数年の企業としての迷走ぶりは、目に余るものがある。異物混入の騒ぎも、これだけ店舗数が多いればヒューマンエラーを防ぐのは難しいだろうなと同情しつつ、諸々の対応の悪さは批判されて然るべきだった。ネットを開くと、マックに肯定的な意見を見かけることは少なくなった。一時はきのこたけのこ戦争と双璧を成していたマックマクド戦争も、今では息をひそめた。もう皆、そんなことを話題にしていない。マックをいかにこき下ろすかに注力している。

嘆かわしいことだ。

マックよ。もっと頑張ってくれ。俺はこれからも食べていきたい。来年も、再来年も、ずっと、ずっと、お前と共に生きていきたい。日本マクドナルドよ、頑張れ。頑張ってくれ。今年の春は何バーガーを食べようか。今年の夏は何バーガーを食べようか。春の桜も夏の海も、あなたと見たい、あなたといたい。今年の秋は何バーガーを食べようか。今年の冬は何バーガーを食べようか。秋の紅葉も冬の雪も、あなたと見たい、あなたといたい。



オタク旦那とノンオタク嫁の家計事情 ～KEIZAI大戦ジェネシス

【エッセイ】【新規収録】

既婚オタク男性の哀しくも楽しい体験談。もちろんのように、あくまで個人の実体験がベースになっております。あなたの過去と未来に「置換」してみてください。

■人生はかくも進みき

「オタク」を最も満喫できるでは、果たしてライフステージのどこに相当するだろうか。そもそも、この場合の“満喫”という言葉の定義から始めなければならない。例えば私の場合、特撮・映画・漫画がオタクカテゴリーの上から3つだ。特撮と映画は時に重なる部分も多いけれど、できれば最低でも週一ペースで映画館には通いたいし、当然のように劇中に出てくる怪獣やヒーローやメカのフィギュアも欲しくなる。映像ソフトは言わずもがなだ。漫画の場合、連載で追っかけている作品は死ぬほどあるので、実を言うとその全ての単行本を定期的を買っていきたい。ふるいにかけたとしても、どんなに頑張っても月に10冊は新たに本棚に並べたいものだ。

そして、独身の頃は前述のような生活をしていた。試しにざっくりと計算してみよう。月に映画を4本観たとして、 $1,800 \times 5 = 9,000$ 円。フィギュアを2体買ったとして、1万円。映像ソフトで月に2万。漫画を10冊買ったなら $450 \times 10 = 4,500$ 円。合計で、43,500円。以前の私の収入であれば、これが「趣味費」としての限度に近かった。家賃と食費と光熱費と貯金と、全てを差し引いて手元に残ったこの数万円をいかにやり繰りするか。それがオタクとしての楽しみ方だった。

そこで本題だが、今の私の「趣味費」は、0だ。0なんだなこれが。悔しいから何度でも書いてみるけど、0円なんですね。0ですよ、0。約43,500が0になったんです。なぜかと言うと、それは結婚をしたから。そして話し合った結果、家計の管理を基本的に嫁さんをお願いしているから。お小遣い制も検討されたけど、将来の子供や人生設計を考えた結果、「欲しい物がある時に逐次申請する」という制度が確立（されて）し（まっ）た。

■プレゼンの醜さ

例えば、欲しい漫画があるとする。『僕のヒーローアカデミア』の6巻。こういう時は、嫁さんにお伺いを立てる。「あの、『僕のヒーローアカデミア』の6巻が欲しいんですけど...」。すると大抵、「えっ？ 僕の～何？は？」と返される。辛いんだなまたコレが。私は一生懸命説明する。「週刊少年ジャンプで連載中の漫画で、『逢魔ヶ刻動物園』時代からファンの堀越先生の最新作なんだけど、ヒーローが当たり前に活躍する社会を舞台に“個性”を持たない主人公が自身の理想を目指して奮闘する様を描いた～」。...こういう時にプレゼンに絶対に必要ない情報を雪崩のように語ってしまうのがオタクとしての悪い癖なのだけど、数分後に嫁さんは必ずと言っていいほどにこのフレーズを発する。

「それ、今、必要なの？」

ひええええええええええ～～～（ズンドズンドズンドコ！！） そ、そ、それを言っちゃあおしま

いよォ！！

そりゃお前モノによっては初回限定特典とか入場者プレゼントとか“今”しかないパターンもあるけれど、例えば漫画のコミックスなんてそう簡単に市場から消えはしないし、映画のソフトなんてむしろ日を置いて待っていた方が後にBOXで安くなったりはしたりするけどさ！するけどさ！するけども！でも“そう”じゃなくて！

お察しのとおり、嫁さんはオタク趣味が皆無だ。唯一挙げるなら、スマホで月額配信サービスに契約した韓ドラを観るくらい。ごく稀に女性ファッション誌を買うくらい。それだけ。だから、毎週のように映画館に通う人間も、月に漫画を何冊も買う人間も、彼女からしたら異星人のような存在。だからこそ、オタクならではの「消費感覚」が根本的に備わっていないし、そしてそれを説明するのはこの上なく難しいことなのだ。

オタクにとって（一般的に）“今”必要なモノなんてごく少数しかない！しかし、オタクにとって（オタク的に）“今”必要なのがそれなのだ！自身の流行り、ネットでの流行り、そういったものが先行し、挙げ句には「買って手元に置いておくこと」が半ば目的化する。本末転倒なのに、そうやって消費のサイクルを繰り返していくのが哀しきオタクの日常なのだ。

かといって現状を嘆いてばかりでは仕方ないし、結婚を後悔したことも一度もない。家計を支配する我が家の大蔵大臣（※嫁さん）を前に、既婚オタク野郎がどう立ち向かいライフラインを維持しているのか。その貴重なノウハウと奮闘記を、ここに記しておきたい。

※完全版は2015年12月末発売予定の本誌に収録予定



なぜ「セッション」のラスト9分19秒は素晴らしいのか？

【映画レビュー】【加筆修正】

根強くアクセスを記録する2015年の奇作「セッション」レビュー。音楽（打楽器）経験者の観点から、実体験を踏まえつつこの映画の熱さを力の限り言語化する。

■その衝撃

映画「セッション」（原題：Whiplash）、本当に素晴らしい映画だった。興奮したし、泣いた。アカデミー賞の助演男優賞・編集賞・録音賞を受賞しているにも関わらず、日本では上映館数が極端に少ないのが非常に悔しい。私が住む長崎でも上映予定が無く、九州では福岡と沖縄のみという大参事。事前の情報や予告を観て期待値がうなぎ上りだったが長崎では上映が無いと知って落胆。福岡への遠征を考えていたところ、filmarks主催の青山シアターでのオンライン試写会を知り、なんとこれに見事当選。スクリーンでないのは惜しいが、自宅で公開1週間前に鑑賞。PCをHDMIケーブルで40型のTVに繋ぎ、部屋を暗くして、ヘッドホンを爆音に。まさに鳥肌と興奮と涙の106分だった。

以下、映画「セッション」のレビュー・感想・解説です。事前の宣伝でも謳われているとおり、ラスト9分19秒の展開が非常に素晴らしい！...が、これはぜひ内容を知らずに臨んで欲しいので、レビューの前半はネタバレなし、後半にネタバレ込み、という形で書きます。私事ですが、小学生の頃からずっと吹奏楽で打楽器をやっていたので、その音楽経験者としての感想も交えながら...

■シンプルさと狂気の熱演、「セッション」の概要

「セッション」の何が素晴らしいかを挙げていけばきりが無いのだけど、まずはその洗練された必要最低限の作り、コンパクトさに尽きる。上映時間はわずか106分という短さ。登場人物も舞台も極端に少なく、物語も時系列に一本道。これだけ書くと薄味な映画に思えてしまうかもしれないが、この非常にシンプルなルールの上に極上の物語と演出が配置されているのだ。結果として、とても観やすく、良い意味で頭を空っぽにして臨める。事前の予習や予備知識なんかは不要。音楽の経験も必要ない。ただ、この106分に身を投じれば良いのだ。

物語は、主人公アンドリュー・ニーマンがドラムを叩くシーンから始まる。彼は名門音楽大学に通う学生で、将来偉大な音楽家になる事を目指して練習に励む。そこに現れたのが指揮者であり教官のテレンス・フレッチャー。大きな声で厳しく彼の演奏にダメ出しをする。その後、フレッチャーの指揮するバンドにドラマーとして招待されたニーマンだったが、彼の常軌を逸した恫喝と暴力の指導に、次第に音楽家を目指し俗世を捨てていく事に...。傲慢さと野心が見え隠れするニーマンに対し、一貫して厳しい指導を続けるフレッチャー。彼ら2人の戦いは、思わぬ着地を迎える事になる。

基本的に教官と生徒の1対1の物語なので、物語の構造は非常にシンプル。他のキャストは、主人公の恋人と父親、ライバルとなるドラマー数人、程度だったかな。舞台も、練習をする大学と発表会やコンサートの舞台が数か所。それと主人公の実家にデート先が数点。本当にこれだけ

。それもそのはず、本作の製作費はわずか3億。驚異の低予算でアカデミー賞3部門を受賞したと、世界的にも話題を集めているのだ。

主役のアンドリュー・ニーマンを演じるのはマイルズ・テラー。決して目を疑うようなイケメンではないのだけど、今作「セッション」における彼の演技は凄まじい。ナチュラルに狂っていくその才能と傲慢さ。少しオタクっぽい風貌が、音楽に懸ける学生としての説得力を持っている。鬼教官テレンス・フレッチャーを演じるのはJ・K・シモンズ。個人的にはライミ版「スパイダーマン」の編集長でお馴染み。彼の演技は本当に狂気の極致。怒り狂ったかと思えば、優しい笑顔もあったり、でもやっぱり怖かったり。飴と鞭というより、鞭と鞭と鞭とたまに少量の飴、といった感じ。観ているこっちの鳥肌が立ち、心臓を掴まれる。このフレッチャーというキャラクターの信条が物語のキモなのだが、それを見事に成立させる熱演だった。

監督のデミアン・チャゼルは弱冠28歳。自身がジャズドラマーを目指していた経験があり、それがこの映画に活かされたとか。脚本も兼任しており、彼のシナリオが2012年のブラックリスト（映画化されていない脚本のなかでも特に優れた脚本のリスト）に載ったことで映画化に繋がったという背景も面白い。詳しくは後述するが、確かに音楽経験者だからこそ撮れた画や演出に溢れていたな、と。

■こんなリアル、本当は観たくない！音楽という狂った世界

私が「セッション」になぜ憑りつかれたかということ、この映画が音楽界の歪な情景を見事に切り取っているからだ。音楽、そして音楽家を目指す者の人生は、本当に狂っている。私自身、小学生の頃から社会人バンドまでずっと吹奏楽で打楽器をやっていたし、弟はプロの音楽家を目指して留学をした。音楽の世界で奮闘する者の苦悩には、少しだけ理解があるつもりだ。

音楽家を目指すというのは、相当な博打。仮に才能があったとしても、それに何倍もの努力を重ねて、更に運があってやっと成功のほんの一片が見えるか見えないか。本当に狂った世界であり、表現は悪いが、普通であれば志さない。やめておいた方が良く。人生においてハイリスクすぎるからだ。更に、音楽家を目指すという事は、莫大なお金がかかる。楽器、練習場所、指導料…。それだけの時間とお金をかけても、夢破れて音楽を諦める人が世界中に大勢いる。夢を追うのはどのジャンルでも難しいのだろうけど、こと音楽については、本当に異質で狂っている。

そして、周囲からの理解も難しい。「セッション」劇中でも、主人公は音楽をやっている事を半ば馬鹿にされてしまう。「良いか悪いかは評価する人のセンスなんだろう？ そんなの運じゃないか」。スポーツとは違い音楽は、明確な得点が積み上がる世界ではない。だからこそやりがいがあるし、だからこそ辛い。そして、名門チームの二軍でプレーするアメフト選手の方が、名門大学の一流バンドで叩く専任ドラマーよりはるかに評価されてしまう。音楽の「すごい」や「うまい」というのは、中々それをやった事が無い人には伝わらないものだ。分かり易く伝えるための数的データもない。孤独に狂った世界なのだ。

主人公ニーマンも、そんな世界に身を投じている。やってもやっても届かない技術、周囲からの冷ややかな目線、理解を得られない信条。彼の野心はフレッチャーの指導を受け、やがて傲慢

さに変わっていく。偉大な音楽家になるためには、全てを捨てていかなければならない。寝る間を惜しんでドラムを叩き、手を血だらけにし、何度も絆創膏を貼っては氷水で冷やす。画面から伝わるその「痛さ」に、思わず顔をしかめてしまう。彼の孤独で前しか見ない戦いが、見事に画面に展開されていくのだ。ああ、こいつ狂っていくな、常軌を逸していくな、と観ているこっちが心配になっていく。でも、だからこそ報われて欲しい。この、努力を超えた努力の成果が観たくてたまらなくなる。

画面全体の明度が極端に低く、暗いシーンが連発。まるでニーマンの心情を投影したかのよう。そして何より、バンド全員で行う全体練習の演出が素晴らしい。指揮者が指揮を始める前のあの一瞬の緊張感。空気が張りつめて、全員の視線が指揮者に集中して、まるで空気中のホコリが床に落ちる音まで聞こえるような、あのヒリヒリしたほんの一瞬。あの瞬間を、この「セッション」は見事に表現している。それは、楽器を構えたキャストの額の脂汗がくっきりと視認できる程に寄ったカメラアングルに、音の無い音、そして何よりJ・K・シモンズの強烈な眼光によるものだ。厳しい指導者が始める合奏練習は、本当にあそこまで張りつめる。空気が凍るのだ。

私は小学生の頃から吹奏楽をやっているが、当時とても怖い先生に教わっていた。というか、今でいうと一発で教育委員会にクレームがいくほどの、暴力教師だ。長い定規で頭をぶたれるのは毎日の事で、演奏中に間違えたら指揮棒が飛んでくるし、げんこつなんか当たり前だし、正座させられた状態でもみあげを引っ張り上げられたりもした。土日も夏休みも無く、休日も朝から夕方までひたすら練習。家に帰っても練習。そしてまた怒られるの繰り返し。何度も練習中に泣いたし、嫌で嫌で仕方がなかったし、その先生に本気で死んでほしいとすら思った事がある。というより、当時は毎日のようにそれに近い感情を抱いていた。しかし、私のいたバンドは全国大会の常連校だった。結果はついてきたのだ。そしてそれから20年以上経った今では、その先生が生涯の恩師だと思っているし、頻繁に連絡を取り合う仲になっている。

決して、音楽指導における体罰やいきすぎた指導を肯定するつもりは無い。しかし音楽というのは、こういう歪な師弟関係や指導が「あり得る」フィールドなのだ。往々にして、「あり得る」。「セッション」の師弟2人のやり取りも、あの強烈な指導も、決してフィクションではない。あれは紛れもなく、あの世界にある真実なのだ。物語としてはもちろん創作だが、デミアン・チャゼル監督自らのジャズドラムの鍛錬の経験が（本作のように厳しい指導を受けた経験が）、この映画には確実に活かしている。

異質な関係や指導が「あり得る」ほどに歪で狂った音楽界。それを見事に表現したこの「セッション」は、俗にいう“リアル”な映画なのだ。少なくとも、20年以上音楽をやってきた私には、そう感じる事が出来た。

本編中盤、フレッチャーが彼の本心を吐露するシーンがある。「危険なのは、上出来（グッジョブ）という言葉だ」。狂気の天才はいつだって“不十分”の烙印を押され、それを跳ね除けようとして努力を重ねてきた。そこで諦め潰えた者は、成功しない。彼の音楽指導における哲学が、ひいては人生哲学に繋がる印象的なシーンだ。前述したように、音楽指導というのは、非常に屈折した行為だ。それがまかり通ってしまう事が、本当はおかしい。しかし、あそこまで常軌を逸した指導がもしかしたら「是」なのではないか、と思えてしまう程に、この「セッション」の空気

感は絶妙だ。観客が、“狂気に慣れて”しまえる。映画に、狂気に対する説得力がある。そのパワーに、頭がクラクラしてしまうのだ。

そしてその狂った師弟関係が、奇妙な絆に変化し、ラスト9分19秒に繋がっていく。この瞬間、涙が止まらないのだ。恫喝の先にあるあのシーンも、あのカットも、あの演技も、全てが昇華されたその先の展開全てが素晴らしいのである。もはやネタバレを避けるなら「素晴らしい」としか言いようがない。これはぜひ、余計な知識を入れずにスクリーンで目撃して欲しい。



by [YU@K](#)

■なぜ「セッション」のラスト9分19秒は素晴らしいのか？

ラストの展開、それはあのステージでの出来事。フレッチャーが見せた優しさは完全なフェイク。行き過ぎた指導が露見し大学を辞めさせられた、そんな自らを陥れたニーマンに復讐するため、あえて嘘の選曲を伝え、観客の前で恥をかかせる。一度離れ離れになった師弟がステージで絆を取り戻す展開かと思ったら大間違い！フレッチャーが本番直前に「お前だろ」と告げた辺りから完全に脳みそグラグラ。観ているこっちも「え？」と冷や汗が出る中、他の演奏者が次々と別の楽譜をめくり出す。あの焦燥感は半端じゃない。それでいて、演奏が始まると何とか食らいつこうとするニーマンが非常に滑稽。横の弦バス奏者に「何やってるんだ!？」と言われるも、だってどうしようもないのだ。あの数分間は非常に怖かった。どんなにドラムを叩こうも、曲と合わない。一応“それっぽく”合わせようとするほど、見苦しさが増すというあのジレンマ。もう、正直観てられなかった。

そして、訪れる敗北。フレッチャーの、自分自身のステージでもあるのにそれをあえて失敗にしてまで復讐するその徹底ぶりに頭が下がる。ステージから満身創痍で身を引くニーマン。抱きかかえる父。「お前はよくやった」。ほくそ笑むフレッチャー。ここでニーマンが何を思い、何を決心したのか、考えると面白い。彼はフレッチャーの本心や信条を、すでに知っている。どこまで彼の意図を汲み取ったのか、どこまで理解したのか分からない。また、今回のほもしかした

ら単純な復讐劇なのかもしれない。ニーマンが「どこ」まで考えを巡らせたのか非常に興味深い、彼はまたステージに戻っていく。フラフラと。

フレッチャーはマイクを持ち、観客に対して説明している。「次はゆっくりした曲を…」と言いかけたその時、ニーマンのドラムが炸裂する。たった1人での、ドラムソロ。しかも、“ゆっくりした曲”だなんて絶対にあり得ないそのテンポ。仰天する他の奏者に、目を見張るフレッチャー。彼がニーマンを脅すも、聞く耳を持たずドラムを叩き続ける。「合図する!」。横の弦バス奏者にニーマンの決意の眼光が飛ぶ。ここで、観ているこっちは物語の落とし所を完全に見失う。まさかの展開なのだ。以前ステージ上でフレッチャーに殴りかかったニーマンだが、彼の2度目の反抗は拳ではなく、ドラムだった。

そして、彼の狂気の演奏が周囲を巻き込み、他の奏者もそれに従うしかなくなる展開。まさに「ねじ伏せる」。ニーマンはその驚異的なテクニックと覇気により、周囲を強制的に演奏に連行した。あのフレッチャーですらその曲に合わせて指揮をするしかない。弦バスのビートが入り、ピアノが続き、遂に「キャラバン」のイントロに入った瞬間のあのカタルシスったらない! ニーマンのフレッチャーへの復讐が、最も“正当な”方法で達成された瞬間なのだ。まさにこの数分間に、復讐劇が交差する構成になっている。フレッチャーからニーマンへの、ニーマンからフレッチャーへの、互いの復讐がクリティカルにヒットするのだ。しかもニーマンのは、この映画で終始求め続けられた圧倒的なまでのドラムテクニックによる復讐だ。これで痺れない人がいるだろうか!

「キャラバン」の序盤、仕方なくこの曲の指揮に収まる事にしたフレッチャーは「お前を殺す」とニーマンに囁く。そして、ここから!ここからの!J・K・シモンズの演技が本当に素晴らしい!全ては表情の演技だ。彼は気付いていく、ニーマンが仕掛けたこの「キャラバン」が素晴らしい演奏に到達しつつある事に。ニーマンのテクニックが、パワーが、他の演奏者を見事に引っ張り上げ、バンド全体が何段階も高い次元に到達しようとしている。J・K・シモンズの表情のひとつひとつから、それを読み取る事が出来る。彼の、認めたくない満足感、それでもこの演奏に納得してしまう音楽家としての性、そのジレンマが読み取れる表情が完璧なのだ。

演奏中盤、管楽器の矢継ぎ早のリズムとドラムソロが何度も交互に行われるフレーズがある。管楽器が「タラッタラッタラッタラ!」と鳴らすと、ドラムが「ドカドカドカ!」とソロで返す(「セッションサウンドトラック」収録「キャラバン」3:43~)。これが何度も繰り返されるくんだり、フレッチャーはとても楽しげに指揮をしているのだ。両手の人差し指を交互に前に指して、この「キャラバン」を指揮する事を純粋に楽しんでいる。ここ!ここなのだ!もうここで泣く!ニーマンの演奏が、あのフレッチャーを楽しませたのだ!あの鬼教官を、純粋に指揮する楽しさに導いたのだ!もはやこの一瞬で、ニーマンはフレッチャーの指導を超越している。弟子が、師匠の教えを超え、還元している。一瞬前まで復讐し合っていた2人が、この瞬間、確かに同時に音楽を楽しんでいるのだ。しかし、これはまだこの映画の最高到達点ではないのだから恐ろしい。

そして、やがて「キャラバン」が終わる。が、ニーマンのドラムは鳴り止まない。彼のドラムは怒涛の勢いのまま続いていく。演奏に没頭し満足感を得ていたフレッチャーも、ここで流石に

焦りを覚える。しかしニーマンはまたもや「合図する！」と。ここで、フレッチャーは彼の意図を察するのだ。

ニーマンのドラムソロは続く。叩き続け、叩き続け、リズムを超越し、息と意識が薄くなる。もはや何を叩いて何をしているのか分からなくなる程に、彼の意識は高次元に達していく。あれぞまさに“ドラマーズ・ハイ”な状況だ。しかし、意識が飛びそうになる彼の手綱を握るのは、フレッチャーだ。彼がドラムのそばに歩み寄り、ニーマンのソロを見守り、そして指導する。この瞬間、他の演奏者も、ホールの観客も、もはや2人には見えていない。それは本編最初のシーンと同じく、まるで2人きりの練習室だ。あの1対1の戦いが、もっともって高い次元で、あろうことか本番のステージで再現されていく。そして、今回ニーマンはフレッチャーの要求にことごとく応えていくのだ。

そして！ここ！ここだ！ここがこの映画の最高到達点！ニーマンのあまりのドラムソロと強打によりスタンドの接続が緩くなり、倒れかけたサスペンドシンバルを、フレッチャーが手に取り、立て直すのだ！彼が！あのフレッチャーが！「大丈夫だ、そのまま続けろ」という表情でニーマンを自然とサポートし、手助けするのだ！

...もうこの一瞬で、私は完全に泣いてしまった。ぶわっと、涙が溢れ出てきた。絶え間なく続くドラムソロの最中に、これまでの師弟関係の全てが昇華されたあのシーンを観て、感極まってしまった。フレッチャーがニーマンをサポートする。手助けをする。ニーマンがドラマーとしてこれまでにない境地に辿り着きつつある事を、鬼教官が認めた何よりの証拠である。彼の教えに、恫喝に、暴力に、ニーマンが完全に応えて、あろうことか師匠を真っ直ぐにねじ伏せた瞬間なのだ。あの一瞬で遂に完成した2人の絆を思うと、涙が止まらないのだ。

やがて終わりを迎えるドラムソロ。感極まっているのは観客だけでなく、劇中のニーマンとフレッチャーも同様だ。そしてそれはただのドラムソロではない。「キャラバン」はまだ終わっていないのだ。溜めて、溜めて、そして辿り着き、管楽器のハーモニーが「キャラバン」に幕を下ろす。瞬間、「セッション」は終わるのだ。スパッとエンドロールに入る。見事！見事である。もうあそこまで行ったら、何かやるだけ野暮なのだ。終わった後の云々なんて、もはや必要ない。ビートで理解しあったのは、ニーマンとフレッチャーだけでなく、観客と「セッション」も同様なのだ。ここでさくっと終わるその潔さが、ラスト9分19秒を唯一無二の素晴らしいシーンに仕立て上げている。

この「セッション」のラストの一連の展開。まずは師匠から弟子への復讐、そして弟子から師匠への復讐、力技で復讐を遂げる弟子、それを認める師匠。やがて、この「キャラバン」1曲の中で、どん底の状態からこの上ない高みにまで、2人の絆が構築されていく。その瞬間、2人はもしかしたら初めて音楽を純粹に楽しんだのだ。本当に見事だ。最高だ。最高としか言いようがない。だからこそ、このラストの展開は素晴らしいのである。この記事のタイトルに「血とビートの殴り合い、恫喝の向こうの涙」と書いたが、涙したのは言うまでもなく観客である。何かを失った訳でも、何かを得た訳でもない。ただ単純に「到達した」からからこそ、そこに届いたからこそ、涙が出る。このラストシーンがあってこそ、「セッション」は唯一無二の傑作になったのだ！



「アベンジャーズ / エイジ・オブ・ウルトロン」は駄作でも傑作でもない

【映画レビュー】【加筆修正】

2015年7月4日更新記事。「アベンジャーズ / エイジ・オブ・ウルトロン」を鑑賞した後に抱いたモヤモヤな部分を、映画評論家・前田有一の評を引用しつつ言語化。同じく映画評論家である町山智浩にもTwitterで紹介されるなど、書いた本人の予想を超えた反響があった。（所要時間：約9分半）

■この映画は決して傑作ではない

あまりにも楽しみだったこともあり、当時は公開日朝イチで「アベンジャーズ / エイジ・オブ・ウルトロン」（以下、AOU）を2D字幕で鑑賞した。間髪入れず同日昼の回で3D吹替。2回連続で観て、やっとなこの映画の飲み込み方の糸口が掴めたような、そんな稀有な作品だった。とにかく圧倒された記憶がある。それは、ストーリーや映像はもちろんながら、このマーベル・シネマティック・ユニバース（以下、MCU）がついに「ここまで」来たのかと。むしろ、「ここで」折り返すのかと、どうにも感慨深くなってしまった。賛否両論はもはや当たり前だろう。

アイアンマンことトニー・スタークが作り上げたウルトロンという人工知能。暴走を始めるウルトロンは、強化人間である双子を従えアベンジャーズと対峙する。正義に対する考え方やウルトロンの開発背景など、無敵のヒーローチーム内にも信頼と主義に亀裂が入る。彼らはウルトロンの野望を挫き、再び世界を守ることができるのか？

まず、恐れずにこれだけは言っておきたい。今回のAOUの「ひとつの映画としてのクオリティ」を語るなら、MCUシリーズの中では「上の下」である。前作「アベンジャーズ」の方が構成を中心に全体の完成度は高く、昨年「ガーディアンズ・オブ・ギャラクシー」はユニバースの枠をある種飛び越えた驚異のバランス感覚で観客を驚かせた。「キャプテン・アメリカ / ウィンター・ソルジャー」も、主人公キャプテン・アメリカの高潔さを軸に圧倒的なまでのアクションを添えた素晴らしい出来だった。それらに比べた時、AOUは決して「秀でてよく出来た映画」ではない。前作同様緻密に組まれてはいるが、これは、「これまでのMCUがやってきたこと」を根本から否定するような、それでいて多くの観客が求めていたものの斜め上を提示した作品である。だからこそ、この映画をファンとして評価するのは、非常に難しい。端的に言えば、前作は「アベンジャーズという名のヒーローチームの映画」で、今作は「アベンジャーズの映画」だ。

■前田有一が触れるAOUの根

この映画を語るにあたって、まず、映画ファンにはいつもネタにされている映画評論家・前田有一の超映画批評を取り上げたい。彼はこのAOUに35点をつけた後に、以下のように語っている。

「アベンジャーズ / エイジ・オブ・ウルトロン」を見ていると、ヒーロー軍団のあまりの無能ぶりにうんざりするはずだ。そもそも自分たちが作り出した人工知能が暴走し、地球をぶちこわすような大破壊戦闘を繰り広げながら、どの口で「人類を守る」などと言うのか。悲劇の英雄気分悦に入っている場合じゃない、お前がまずやることは焼き土下座である。だいたい、そもそもの原因はおまえたちであって、巻

き込まれる庶民はたまったものではない。これじゃウルترون（暴走した人工知能）でなくとも「元凶はアベンジャーズ」と言いたくなる。こちらの方がよほどの確な判断をしているのではないか。

相変わらず我が強くてチームがまとまらず、ぐずぐずしながらも、それでも最後は力を合わせてエイエイオー！ ともりあがっているのを見ていると、おまえらいったい何と戦ってんだと空しくなってくる。いっそおまえたちがいない方が平和なんじゃないか、そんな風にすら思えてくる。

・ [「アベンジャーズ／エイジ・オブ・ウルトロン」35点（100点満点中）マッコヨと巨乳の無能集団](#)

これを読んで、おそらく多くのファンが「何を言っているんだ」と思うだろう。しかし、前田有一の批評は、実はAOUの根っこに確実に触れている。ただ、向いている方向が180度逆なだけだ。

今回のアベンジャーズがやっていることは、壮大な「尻拭い」だ。アイアンマンことトニー・スタークが作ってしまったウルترونに、常に一手遅れた形でアベンジャーズが応戦する。ハルクを操られ市街地で大規模な破壊を伴う戦いを繰り広げてしまうし、宙に浮いた街は無事隕石にはならなかったものの消滅してしまった。終始、これでもかとアベンジャーズの面々が一般市民を救出するシーンが描かれるが、冷静に考えればこの映画の中で誰一人死んでいない訳がない。ただ、それが画面に映っていないだけで、確実に「アベンジャーズによる一般市民の死」は訪れているだろう。また、百歩譲ってそれが無かったとしても、命が助かったからそれで良いという訳ではない。トニーが基金で対応しボランティアを差し向けたからといって、それで十分に足りる訳でもない。確実に建造物や生活は破壊されたし、怪我も病気も蔓延しただろう。彼ら一般市民が通常の生活に戻るまで、どれくらいの期間を要するのだろうか。

アベンジャーズの面々は、それを全て分かった上で、今回の戦いを乗り越えた。中盤、ホークアイことクリント・バートンの家に身を寄せたくだり、トニーとスティーブが薪割りをしながら主義主張をぶつけ合うシーンがある。トニーはとにかく強調する。「我々は家に帰るために戦う、チームを無くすために戦うんだ」と。「アベンジャーズがなくなる」ことは、つまり「アベンジャーズでなければ対処できない驚異の消滅」であり、それが平和である、と。対してウルترونは、「平和のためにアベンジャーズ、もとい人類を滅ぼす」という行動原理によって諸々を画策する。実はこのAOU、対するふたつの陣営の双方ともに、目的は「アベンジャーズを無くすこと」なのだ。アベンジャーズを無くすことを、アベンジャーズ自身も、ウルترونも、求めている。だからこそ、このAOUは「アベンジャーズとは？」というこのMCUの根幹も根幹の部分を語る映画になっているのだ。

ウルترونの行動原理も、正直なんら新しいものではない。むしろ「平和のために人類は滅ぼすべきだ」というのは、今ではもはや少々手垢がつきすぎた主張だ。日本のあらゆるアニメや特撮でも、そういった敵は無数に出てきた。ただ、今回のウルترونが面白いのは、それがそのままアベンジャーズの是非にも繋がってくるところだ。アベンジャーズという、あまりにも強力す

ざるヒーローチームは、ともすれば世界を救い、時には（今回のように）諸悪の根源になり得る。そんなアベンジャーズが「成立」していることが、果たして正しいのか？間違っているのか？そこをウルトロンは問いかけている。

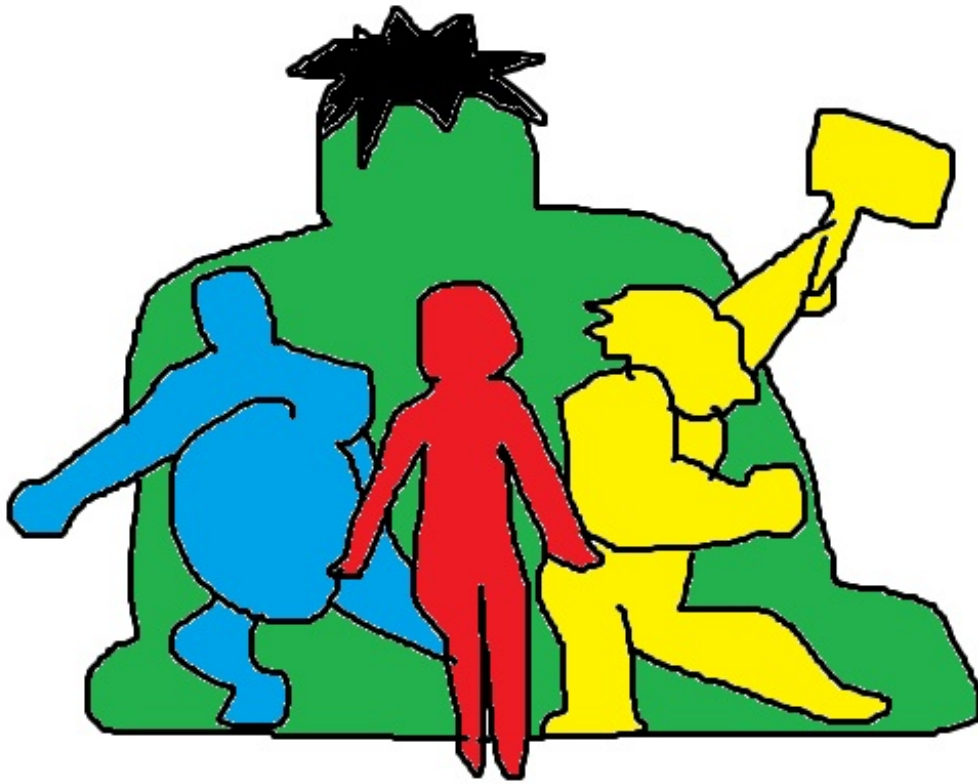
■ホークアイの台詞が持つ意味

だからこそ、ストーリーはアベンジャーズメンバーの人間性に踏み込んでいく。

自らの怪物性に怯えるブルース・バナーに、同じく「（避妊手術による感情的な）人間離れ」を自覚するナターシャ・ロマノフが歩み寄る。このカップルは、一見悲哀として美しいが、やっていることは傷の舐め合いであり、あれ程までに強力なハルクとブラックウィドーがいち個人であるというギャップを醸し出している。チームの顔であるトニーは実は誰よりも臆病で、外敵の襲来に対する対抗策を考えてはそれに取り憑かれている。これは「アイアンマン3」でも描かれた葛藤だが、彼の「自分たちで守れなければ…」の選択肢は、スティーブ・ロジャースとは水と油だ。キャプテン・アメリカは眩しいまでの正義であり、それがトニーの持つ影を一層濃くする。彼に選択肢は無いに等しく、誰よりも愚直に自分と仲間を信じることで葛藤をとうに吹っ切っている。ソーは、今後のMCUで物語のメインとなっていくインフィニティ・ストーンに一番近い存在であり、だからこそ自身の溢れんばかりの力がいつ暴走してしまうか、葛藤している。

そして、今回家族の存在が明かされたホークアイが、実は誰よりも早く葛藤を乗り越えており、最も俯瞰した視点で「アベンジャーズ」を見ることができるといえるのだ。彼だけが、ただ一人、抱えていない。すでに家族を抱えているからである。

そんなホークアイだからこそ、前田有一が批判した、そしてウルトロンが問いかける、「アベンジャーズは必要なのか？」のカウンターポジションになれる。終盤、スカーレット・ウィッチと家屋に逃げ込んだ際に、彼は彼女を諭す。「自分のせいだとか、今はそんなのはどうでもいい。戦えないなら戦わなくていい。だが、ここから外に出たなら、君もアベンジャーズだ」。つまり「アベンジャーズ」とは、「アイアンマンとキャプテン・アメリカとソーを中心としたヒーローチーム」という意味を超えた、“何か”なのだ。それは一種の象徴であり、存在であり、脅威であり、憧れであり、希望。「アベンジャーズがアベンジャーズでなくなる」ことが、このAOUが踏み出した一歩であり、今後のMCUを別次元に押し上げていくのだ。



by [YU@K](#)

■MCUが振り戻した“針”

決して、一般市民の犠牲や、時に諸悪の根源となってしまうことを「是」とはしない。しかし、アベンジャーズが象徴的な何かに羽化していくために、その「存在が抱える矛盾」を見て見ぬ振りする訳にはいかないのだ。AOUは、「敵が攻めてきてヒーローが派手に大活躍して倒してイエーイ！」な映画に、いくらでもすることができた。全世界にファンがいるのだから、それは、やれば確実にウケる。みんな、アイアンマンやキャプテン・アメリカの派手な活躍が観たくてたまらないからだ。

しかし、そんな「真っ直ぐさ」や「明るさ」「明朗さ」「分かりやすさ」を、今回マーベルスタジオは意図的に避けた。サム・ライミ版「スパイダーマン」や、もっと挙げれば「X-MEN」シリーズや「ダークナイト」三部作等がやってきた「ヒーローも人間であり悩む」というトーンを半ば否定する形で、分かりやすく活劇的なヒーローを打ち出してきたマーベルが、このMCUフェイズ2終盤でついに針を振り戻した。世界中の観客が潜在的に求めていたであろう「分かりやすいヒーローたちの活躍」を映像的には叶えつつ、物語で否定してきた。彼らは、自分自身のこと、アベンジャーズのこと、そして「平和」とその手段について葛藤するいち個人なのだ。

■フェイズ3で変革する「アベンジャーズ」

だからこそこれは、今後のMCUに向けた試金石だ。控えるはアイアンマンとキャプテン・アメリカが対峙する「シビルウォー」であり、「アベンジャーズ/インフィニティ・ウォー」でついにインフィニティ・ストーンを巡る戦いは大詰めを迎えるだろう。ヒーローたちの分かりやすい明朗さ、そして「一見馬鹿馬鹿しく見えるコスチュームや要素をリアルに明るく落とし込む」というMCUが積み上げてきた「陽」の方向性に、今回のAOUは一気に影を落とした。それは今後のユ

ユニバース展開に向けた前振りであり、伏線と要素も同時に沢山散りばめている。

この「アベンジャーズ/エイジ・オブ・ウルトロン」に、現時点で何かの評価を下すことは、私にはできない。それは今後のユニバース展開をこの目で観て、結果的に浮かび上がってくるものだろう。こんなにも素晴らしい映画でありながら、その評価を、最終的な感想を、「保留」にさせてくるなんて、MCUは本当にやってくれる。全世界で爆発的な興行成績を叩き出し、それほど世界中にファンがいるシリーズでこれをやるのは、相当なことだ。あくなき覚悟と挑戦だ。AOUは、傑作でも駄作でもなく、長きに続くユニバースのほんの一編であり、単なる壮大な「記録」なのだ。

次弾である「アントマン」が飛び抜けた明るさとカラッとした持ち味を有していたことから、このAOUにおけるMCUの「覚悟」が相当なものだったと改めて痛感する。ヒーロー同士の内紛と未曾有の宇宙規模の戦い、そこで果たして「アベンジャーズ」は“何”になるのだろうか。



THE BEST -出張版不定期村- サンプル版11.18

<http://p.booklog.jp/book/102712>

著者：Y U@K

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/yukks453145/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/102712>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/102712>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ